

**祝 第44回 卒業証書授与式 (3月8日)**

3年生は、これまで学校をリードしながら新たなことにチャレンジし、成し遂げてきました。ここでは、卒業に向けて**3年生みんなの思いを紡ぎ、創り上げた至極の「答辞」**をご覧くださいながら、卒業生の3年間で振り返ります。

**答 辞 (作:第44代卒業生の皆さん)**

コロナウイルスの脅威という、人類にとって3年余りの長い冬を乗り越え、初めて迎える春の風が、私たち124名の卒業を祝っているようです。今、こうして卒業のときを迎え、私たちが太宰府中学校で過ごした3年間で思い返すと、どれも濃密な思い出として甦ってきます。

ぶかぶかで真新しいブレザーの制服を身にまとい、不安と期待に胸を膨らませて校門をくぐった入学式。昇降口の前に貼られたクラス名簿の中に、小学校で仲の良かった友だちの名前や、幼稚園で一緒だった友だちの姿を見つけることで、朝からの緊張がほんの少し緩んだのに、呼名のときの担任の先生の声があまりに大きくて、緊張が朝より高まりました。

コロナウイルス感染拡大の影響で、1年生での自然教室が中止になっただけに、絶対に行きたかった修学旅行では、行ったこともない奈良や京都を、計画通りに回る事ができるか心配でした。しかし、親切な地域ボランティアやタクシーの運転手さんの案内と、班の友だちとの協力で、予定にはなかったところまで見学することができました。そして、夜に先生たちの目を盗んでおしゃべりしたりこっそりテレビをつけてワールドカップの観戦をしたりしたことは、もう時効ということでもいいですね。

3年生になって、体育祭がコロナウイルス感染拡大前に近い形で開催されることを喜んだものの、『本格的な体育祭』とか、『リーダーを中心に』と言われても、見たこともないことをどうすればいいのか、誰に相談していいかわからず、泣きたくなるような日々の連続でした。それでも、自分たちの力を信じて、リーダーを中心に、とにかくみんなで大きな声を出しながら、がむしゃらに頑張る姿を見せることで、先輩たちと心が一致した本番は、この学年にしか創れない体育祭を創り上げたという感動で胸がいっぱいになりました。後に、校長先生から『本番に強い3年生』とお墨付きを頂いたのも、体育祭の成功が星翔(スタート)でした。

中体連での勝利やコンクールの入賞を目指して必死に練習した部活動は、まさしく私たちの星春(せいしゅん)そのものでした。しかし、1年生の頃は練習が辛かったり、うまくいかないことが多かったりして、行くのが嫌な日もありました。そんなときに、早朝や休日に自主練習に励む友だちのことを知り、頑張ることの大切さに気付けたのも部活動でした。そして、『今日は楽しんでください。』という顧問の先生の言葉と、『お前ならできる!』と会場に駆けつけた友だちの声援のおかげで、最後の中体連やコンクールでは、これまでの練習の成果を存分に発揮することができました。

校長先生の『四部合唱校歌を復活してほしい』の言葉から始まった合唱練習は、学級曲も難易度が上がって、思ったようなハーモニーが創り出せない中で、これまで歌ってきた校歌とは違う四部合唱のメロディや音程はとても難しく、学年の一体感がなかなか生まれずにいました。しかし、プラムカルコアで披露した歌声は、龍星群(りゅうせいぐん)のように煌いて、歌っている途中から感動に包まれました。合唱を終えた直後、会場から『ブラボー』という声

が聞こえた瞬間、『太宰府中学校の四部合唱校歌を、伝統にしたい』という一人ひとりの思いが一つになったと感銘を受けました。

1年生のときから『受験勉強にフライングはない』と言われてながらも、まったく勉強に身が入らなかった私たちにとって、受験は初めて自分の将来について考える機会になりました。進路選択に正解はないだけに、得体のしれない怖さと苦しさに押しつぶされそうになりましたが、たくさんの高校体験に行くことで、やりたいことや生き方について真剣に向き合えました。それでも悩んだり迷ったりしたときに、家族や先生が自分に合った進路と一緒に考えてくれたことで、進路決定に前向きになれました。また、仲間と励ましあうことで、少しずつ成長している自分を実感できました。

登下校や行事など、私たちが様々な場面で見守ってくださった地域のみなさんから、『行ってらっしゃい』『おかえりなさい』と声をかけていただくことで、私たちは安心した生活を送ることができました。しかし、毎日みなさんから温かい言葉をかけてもらいながらも、なんと言葉を返せばよかったのか、未だに正解がわからないままに卒業を迎えています。そんな未熟な私たちを支えてくださった地域の方々のことを、私たちが育った『ふるさと太宰府』を学んでいく中で、誇りに感じていました。

生徒全員が、個性を光らせて過ごせる学校を目指して私たちが掲げたスローガンは、『百花繚乱』でしたが、先輩の皆さんが光る場面を作ることができたでしょうか。今振り返ってみると、新しい取り組みに精一杯で、皆さんのことまで考えて行動できていなかったように思います。それでも、私たちが零から手探りで創り上げたものを引き継いでもらえるなら幸いです。そして、先輩たちから受け継いだ伝統を守りつつ、私たちが大好きな太宰府中学校を更に『進化』させてほしいと思います。

コロナ禍で、不安なまま始まった中学校生活を支えてくださったのは先生方でした。行事に全力で取り組む姿に、精一杯頑張ることの素晴らしさを教えていただきました。悩みと一緒に向き合ってくれたことで、解決する方法を知りました。ときには本気で叱ってくださったことで、人として大切なことに気が付きました。私たちと一緒に喜んだり悲しんだり悩んだりしてくださったすべてのことに、先生方の愛情を感じていました。

部活動や塾の送り迎えや、体操服の洗濯をいつもしてくれたお父さんお母さん。毎日作ってくれたお弁当も、当たり前のことだと思っていましたが、数えてみると700回以上にもなって、改めて有難さを感じています。また、私たちのことを心配してかけてくれる言葉にも、反抗的な態度ばかりをとってしまって、ごめんなさい。今までは照れくさくて言えませんでした。これまでの十五年間を支えて、やりたいことを全力で応援してくれたことに、『ありがとう』を一万回言っても足りない程、感謝しています。

太宰府中学校で過ごした3年間は、コロナ禍で不自由なことも沢山ありましたが、そのおかげで『当たり前であること』の幸せに気づくことができました。また、コロナ禍で途絶えたことを、私たちの代から新たに創り上げる貴重な機会を与えていただくことで、創造性を身につけることができました。そして、沢山失敗する度に多くのことを学び、自信を持つことができました。

これから私たちは、それぞれの道を歩むこととなりますが、太宰府中学校で過ごした3年間で培った創造力を生かしながら、失敗を恐れず沢山のことに挑戦し続ける人でありたいと思います。その上で、負けそうになったり泣きそうになったりしたときには、太宰府中学校で成長できた自分を信じ、前に向かって歩みを止めないことをここに誓います。伝えたいことは、まだまだありますが、今まで私たちを見守り、ときには厳しい言葉で導いてくださったすべての方々に感謝しつつ、卒業の言葉にしたいと思います。

令和6年3月8日 第44代卒業生代表

保護者・地域・関係の皆さまへ

本校ホームページ「うそでよのひとりごと」に、学校だよりでは紹介しきれない学校生活の様子を掲載しております。ほぼ毎日更新しておりますので、ぜひ、ご覧ください。 ホームページはこちら

